「いやしと甦りの力」（ルカによる福音書八章四〇～五六節）

1　二つの出来事

今日の聖書箇所は、イエスが弟子たちと一緒に、ゲラサ人の地から帰って来たところから始まります。ガリラヤ湖の対岸ゲラサは、ユダヤ人の住んでいるところではありません。異教の地です。しかしイエスはそこにも出かけて行き、悪霊に憑かれた人をいやして戻って来たのです。

このゲラサでのいやしのことも伝わっていたかどうか、それは分かりませんが、その地に渡る前のイエスの教えといやしの働きはすでにユダヤの民衆のこころを強く動かしていました。ですから、今日の箇所の最初の言葉、「群衆は喜んで迎えた。人々は皆、イエスを待っていたから」（四〇節）は、文字通り、民衆は大歓迎したと、受けとってよいと思います。

この民衆の期待感、その中には、よく分かっていない、興味本位のものもあったと思いますが、今日の聖書に出てくる二人の場合は、そうではありませんでした。期待感というより、イエスにかけるその思いは、まさに真剣そのものであったのです。二人とは、一人は、ユダヤの会堂長で「ヤイロという人」です。もう一人は長く病気をしていた一人の女性です。

今日の聖書箇所も、先週の悪霊に憑かれたゲラサ人の話と同じく少し分かりにくいところがあります。というより、あまり例のない書き方になっています。二つの出来事が絡み合って、パノラマ〔連続的に移り変わる光景〕のような一つの話になっています。今日も、概略を申し上げることから始めたいと思います。

すでに群衆に囲まれているイエスのところに、ヤイロという名前の一人の会堂長がやってきます。会堂長というのは、ユダヤ教の礼拝堂（シナゴーグ、会堂と訳されている）の管理人です。建物の管理というより、むしろ礼拝の奉仕者を選んだり、自らも司式をしたり、民衆の宗教生活全般で指導的な立場にある、人々の尊敬を受けていた人です。

彼は来て、イエスの足もとにひれ伏し、一人娘が死に瀕している、自分の家に来て助けてほしいと懇願し始めたのです。イエスは承諾し、ヤイロと共に、彼の家に出かけます。群衆も周りに押し寄せ、おそらく彼らもそのまま、押し合いしながら、その後をついて行ったのです。

ところが、途中、まったく予期しないことが起こります。急に現れた一人の女のため時間をとられ、イエスがヤイロの家に着くのが、かなり遅れてしまったのです。群衆の中にいた女は、わらをもすがる思いで、イエスの服のふさに触った。するとたちまち病気が治った。何かが起こったことに気づいたイエスは、触ったのはだれか周りに問いかけます。女が、震えながら進み出てひれ伏し、ことの次第を語ると、イエスは女に、「あなたの信仰があなたを救った、安心して行け」と、語って下さったというのです。

いまこうして聖書を読んでいる私どもも、道草とは申しませんが、ヤイロの家に行

くのが遅れてしまう、だいじょうぶか、一刻を争うのではないか、ともかく急いで行かなければと思います。だれよりもヤイロの気持ちは、どんなだったでしょうか？　また弟子たちはどう感じていたでしょうか？　しかしイエスには早く切り上げようとするそぶりは見えません。

案の定、その間に、ヤイロの娘は死んでしまいます。ヤイロの家から人が来て、それを主人ヤイロに伝えます。お嬢さんは死んだ、これ以上、先生（イエス）をわずらわすことはありませんと。

これを聞いていたイエスはしかし、ヤイロに、「恐れることはない。ただ信じなさい。そうすれば、娘は救われる」と語り、ヤイロの家に向かいます。家の前、あるいは外では、人々が、娘が死んだことを泣き悲しんでいます。しかしイエスは、それらにあらがうように、彼らに、泣くな、死んだのではないと言い、家に入り、死んだ娘の手をとり、「娘よ、起きなさい」と呼びかけ、一二才のその娘を生き返えらせたのです。以上があらましです。

2　イエスの言葉、イエスの行動

これらの出来事を読んで、私どもが、いまも注目すべきは、イエスの言葉、イエスの行動でなければなりません。

はじめに、途中から入り込んで来た一人の女性との関係で、イエスに、もう一度目を向けてみます。私どもは何よりも、イエスが途中で立ち止まって下さったことに引きつけられるのではないでしょうか。

少しでも早く行きたい。当然です。ヤイロの気持ちはどうだったのでしょうか。しかしそこに、長い間病気で苦しんでいる人がいる、医者に財産を使い果たした貧しい人がいる、助けを求めている人がいる。彼女が、ともかく最後の望みをかけて、イエスに手を伸ばした、その彼女のために立ち止まってくださったのです。それが、この事件から見える、主イエスです。

ヤイロも弟子たちも、「触れた理由」と「たちまちいやされた次第」を女が皆の前で話したので、彼女がユダヤでは汚れとされた血の流出（レビ一五章）をわずらい、人との接触も断たれていたことを知ります。だからこそ、イエスも、そんな女のことに関わっているべきではないと、考えたでしょうか、それともイエスの関わりを、さすがイエス様と見ていたのでしょうか。それは分かりませんが、少なくとも、ヤイロが信頼し、弟子たちが従ったイエスは、目の前の困窮を、度合いをはかって後回しにしたりなさらない、通り過ぎてしまわない方でした。

イエスは女に、「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい」と語られます。「あなたの信仰があなたを救った」、この説明は後回しにし、「安心して行け」をいまは取り上げます。マルコによる福音書は、もう少し詳しく、「もうその病気にかからず、元気に暮らしなさい」（五・三四）というイエスの言葉を伝えています。病気にかからず、元気に暮らしなさい！　考えてみれば、何と当たり前の言葉でしょうか。イエスは、そしてイエスを通して神は、私ども人間の、こうした健康を求める願い、不安なく暮らせる日々の生活、社会の中で人と人との交わりの中に生

きられること（この女はそれができなかった）に味方しておられる。それがイエスであり、イエスの父、聖書の神なのです。

次に、ヤイロとの関係で、イエスに、目を向けてみたいと思います。

イエスはその家に着くと、ペトロ、ヨハネ、ヤコブ、それに娘の父母のほかには、だれも、一緒に入ることをお許しにならなかった。人々は皆、娘のために泣き悲しんでいた。そこで、イエスは言われた。「泣くな。死んだのではない。眠っているのだ」。人々は、娘が死んだことを知っていたので、イエスをあざ笑った。イエスは娘の手をとり、「娘よ、起きなさい」と呼びかけられた（五二～五四節）。

ヤイロの家に着くと、家の前には、一群れの人々がいて、皆、泣いていました。この人たちをイエスは排除し、家の中には、ペトロら三人の弟子と、娘の父と母しか入ることを許しませんでした。

なぜ、娘のために泣いている人々に、泣くなと命じ、彼らも含めて、家に入ることを許さなかったのでしょうか。イエスの厳しさがここにはあります。厳しさとは、泣いている人の思いにイエスが共感していないように見えることです。イエスはそこに死に魅入られている人の姿を見いだしたのです。イエスにとって、死が最後の現実ではありません。死もまた神の支配の下にあるのです。その神の現実を告げることのできるただひとりの方、イエス、この方がここにいます。どうして泣いていられるでしょうか。「泣くな。死んだのではない。眠っているのだ」。この言葉によって娘は生き返ります。私どもが、すでに七章で見た、ナインの町のやもめの一人息子がそうであったように生き返ります。

このヤイロの娘の生き返りも、ナインの若者の生き返り同様、蘇生です。ですからここですでに永遠の命にあずかっているので、もはや死ななくて済むというのではありません。しかし「娘よ、起きなさい」というイエスの言葉は、永遠の命の言葉でもあります。その息吹に触れて、蘇生したこの娘も、イエスによってやがてもたらされる命にあずかる希望に生き始めるのです。

むろんまだ、イエスも復活以前を生きなければなりませんし、死の現実は人間を脅かしつづけます。罪も死も本当に克服されるのは、先のことです。それゆえイエスは、娘の両親にも、今は「この出来事をだれにも話さないように」（五六節）と、命ずるほかはなかったのです。

3　恐れるな、ただ信ぜよ

ここまで私どもはこの出来事におけるイエスに、その言葉とその振る舞いに、注目しました。明らかになっているのは、いやしと甦りの力をもつイエスは、神によって遣わされた救い主であることです。そこでいまもう一つの注目点、「信仰」に目を向けたいと思います。

信仰、これは人間の側のことです。この箇所で、信仰は、どのようなものとして語

られているのでしょうか。

これもはじめに、一人の女において示された信仰を取り上げます。群衆に中にいた女は、後ろからイエスの衣のふさに触ります。マルコによる福音書には、その時のことが次のように描かれています。

> イエスのことを聞いて、群衆の中に紛れ込み、後からイエスの服に触れた。「この方の服にでも触れればいやしていただける」と思ったからである（五・二七～二八）。

イエスの服に触れたときの女の思いはいまお読みしたようなものでした。長くつづく病気、財産もなくし、いよいよ追いつめられ、近頃評判のイエスに一縷の望みを託したのです。でもどうすればいいか分からない。彼女はせめてイエスに触ればと思い、後ろから近づき、その衣の房に触ったのです。この求める女に神は救いの扉を開いてくださったのです（マタイ七・七）。

女がそうしたこと、そしてたちまち病気が治ったことなど、むろんだれも知りません。しかしイエスだけは、それを知ってくださったのです。自分の体で受けとめてくださったのです。わたしから力が出ていくのを感じたと。

そしてこの女の行為を、イエスは信仰と言ってくださいました。むろんイエスの服にでも触ればなおしてもらえるというのは、迷信のようなところもあります。しかしそれが信仰のゆえだったのだと悟るなら、彼女は、この先も、どこでも「信仰」によって生きていくことができるようになるのではないでしょうか。

次に、ヤイロの場合です。彼にも、この女と同じ信仰が見られます。それは、最初に、イエスの足もとにひれ伏したときです。娘が死にかけている、それはどんなつらいことだったかと思います。しかし彼も、会堂長という世間体のようなものも、それがあったとして、捨ててイエスにすがります。ただ神の救いを求め、ただイエスに信頼する、それがヤイロの信仰です。

もう一つのことがあります。家から来た使いから、お嬢さんは亡くなったとヤイロが聞いたときです。これを聞いたときの彼の反応は、聖書に書いてありません。むしろイエスが、傍らで驚いているヤイロに、直ちに語りかけるのです。「恐れることはない。ただ信じなさい」と。

恐れというのは、心配することです。悪い結果を心配しての不安とか、心労とかいうものです。いまヤイロから、イエスなら助けてくれるかも知れない、いやしてくれるかも知れない、その望みが、家からの使いで、消え失せようとしています。しかし恐れてはならない。

恐れないこと、それが信じること、その始まりです。未来の時間を神に委ねるといってもいいと思います。「恐れるな。わたしは最初の者にして最後の者」（黙示一・一七）。家に来て助けてくださいという願いを、ヤイロは恐れのゆえに取り下げることをしてはならないのです。恐れず、信じること、これもまた、今日の聖書箇所が私どもに教えている信仰なのです。

（二〇二一・八・一五）